ともに揺れるブラノコ

鍋島 恵美

（飯能緑の少年隊事務局長）
おかあさんとともに揺れる

一九九七年の春、私は四歳児を受け持ちました。その中にいるA夫人は、三歳児の生活を他園で過ごしていたのに、今になってどうしょうでしょうかと、A夫の母は、幼稚園に来てくるわが子の心を察しかねて困っています。私は「新しい環境にAちゃんの心がガラガラ揺らいでいるのと違うでしょうか」と、一緒に傍で遊んで下されています。A夫には、今は保育者でなくおかあさんが必要なです。このことをA夫の母に、納得してもらいました。元気にしてもらうことには難しく感じました。元気にながらが子と遊ぶおかあさんの心は、早くわが子も……と揺らいでいたに違いないです。おかあさんの目が、まるで子が他の子どもに向けられている時、「おかあさん、Aちゃんも一緒に遊ぼうよ」と、素直に応じて下されました。

秋の頃、母と保育室の前まで来て、そこで別れるようになったり、おかあさんにも仲良しの人ができたようでした。

私と揺れる

Aちゃんいるよ
特集〈支える〉

一方、行動に気を配りました。彼は、描いたり作ったりするために、しっかりとした形を整えています。好きなことをつぎつぎと見付けては、安心することができるのです。

家族は、「心の系譜」をつなぎながら、彼らの存在が貴重に思われました。S夫・Y子から、神楽作りが始まり、A夫に「お祭りの飾り作って、お店しようかな」と誘い、一緒に作って出ました。今度は、私も神楽作りに参加しました。

A夫とS夫は、「Aちゃんの飾り」「いしも。買いにいく」と、声をかけたり、なりゆきのまま、元気のよい神楽を楽しむ子どもたち。その勢いに押され、私たちも一緒に手を貸していきました。その中で、A夫の心が開かれていることが分かりました。

虫探しの探険が始まりました。A君と、S夫からの呼び掛けを耳にするようになりました。私たちは、A君を支え、A夫の存在感をクローズアップしていきました。

一九八八年の春、五歳児の保育室は二階。A夫も母と別れて保育室へ来ています。A夫は、プール遊びは苦手です。A君が「おいで」と手を差しのべると、A夫はその場で洗い、水を洗う時も「Aくん、ここ、この水入れ」を手をさしのべます。それなりに気付き、S夫が「A君おいで」すると、手をさしのべます。これを繰り返すうちにA夫は、A君と観察していきます。
しばと、それに支えられるA夫の関係が、おかあさんと子どものような、彼との関係は対等なのか
った。私も積極的にその中に遊びました。園庭のイ
びきっかけになり、みんなでここっこが始まりまし
秋の頃「昔（昨年のこと）したなあと」と、神奥
ヤ店作りが始まりました。A夫は、川焼き屋を始め
ました。U子やT子が「寄せて（入れて）」ときま
した。カマキリの赤ちゃんの誕生から、カマキリ探
の周りにカブトムシやカマキリなどの家を建ち虫の
き動け、スズメバチの家作りを毎日繰り返しました。彼
をしました。家作りでT夫と互角に争っていました。
いざ……頑張れ」と、私は心の中で応援しました。
とうとうA夫が、声をあげて泣きました。しばらくし
て、T夫と仲直り。彼らで妥協案を見つけて、相手に自分を思い切りぶつけています。しばらくし
てある時は、スズメバチさん、大変！カブト
特集〈支える〉

ともに揺れる